

図書館だより

「学問における真理」について 創立110周年記念出版物	—島崎 恒蔵	1
『JWU 1901-2011 : a history in photographs』の紹介	—岸本美香子	2
日本女子大学叢書の紹介		
ソートン不破直子・内山加奈枝編『作品は「作者」を語る —アラビアンナイトから丸谷オーまで』	—内山加奈枝	3
ベルリン図書館事情		
—連邦公文書館内東ドイツの政党と大衆組織財団図書館	—印牧 沙織	4
日本女子大学図書館友の会第47回・平成24年度総会 開催される	—中曽根 緑	5
展示「図書館を探検しよう！2012」	—中澤 恵子	6
展示「上代タノ平和文庫創設40周年記念展」	—濱口 都紀	6
「レファレンス研究分科会」の紹介	—鈴木 学	7
「逐次刊行物研究分科会」に参加して	—田代 陽子	7
図書館からのお知らせ		8



館内スタンプラリー風景（目白）

「学問における真理」について

島崎 恒蔵

最近、量子力学の基本原則として長年信じられてきた「不確定性原理」に対し、日本人研究者から一石が投げられた。この理論は、ノーベル賞を受賞したドイツのハイゼンベルグが1927年に提唱したもので、現在よく利用されている半導体などの開発も、この原理が根底にある理論に基づいているというから、素人目にも重要な基本原則であることが窺える。もちろん、この不確定性原理が全面的に覆ったというようなことではなく、あてはまらない具体例が指摘されたものではあるが、新たな応用への活用性を含め波紋は広がっている。

物理学においてニュートン力学は、一つの根幹をなすものである。力と質量に関する諸現象は、ニュートン力学で正確に説明することができる。惑星の動きなども説明でき、去る5月21日の金環日食は記憶に新しいが、日食、月食などの予測も可能である。ただ細かい点を言えば、たとえば水星の近日点の移動現象などは、説明が困難である。しかしアインシュタインの一般相対性理論では明瞭にこの現象を説明できる。その点からも相対性理論は、ミクロの世界やニュートン力学をも包含する進んだ理論であると言えるが、これによりニュートン力学が完全に価値を失ってしまったわけではなく、また相対性理論においても説明できない現象がある点にも注意を払うべきである。

昨年9月、素粒子であるニュートリノが光速を上回ったとの実験結果の報道がなされた。重力波やニュートリノは光速で走るとされており、その実験結果が事実であれば相対性理論の根幹が揺らぐことになる。しかしその後、別の国際チームの計測結果では、ニュートリノの速度は光速並みだったとの反証も出された。これからもこのような理論と実験の“せめぎ合い”が続くのであろう。

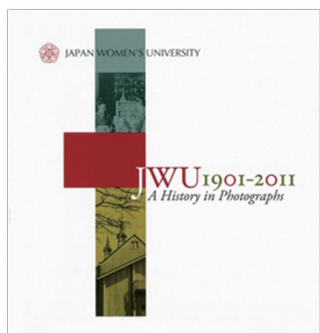
上述の理論に対する“せめぎ合い”は、必ずしも自然科学分野に限られたものではなく、類似したことは他分野でも起こり得ることである。たとえば人文科学の分野では、歴史的新発見によって定説が覆されたり、修正されることがある。「これが真実である」ということを普遍的に極めることは、決して一筋縄ではいかないという認識と、すでに存在する理論や定説においても極めて複雑な要素が内包されているという視点を持つべきであろう。図書館を含め、われわれの身の回りにある書籍や資料が主張する“真実”というものに、じっくりと向かい合う姿勢が望まれよう。

(図書館長・被服学科教授)

創立110周年記念出版物

『JWU 1901-2011: a history in photographs』の紹介

岸本 美香子



当初、創立110周年にあたっては特に記念出版物を刊行する予定はなかった。2008年に創立者の生誕150年記念出版物三部作を出したばかりで、2019年の創立者没後100年、2021年の創立120周年にむけて今は体力を蓄えるときと考えていたからだ。

それが一転して英文の写真集を出版することになったのは、3月に起きた東日本大震災の影響で、6月に予定されていた学生による国際シンポジウムが中止されたことによる。発行は記念式典が行なわれる2011年11月、準備期間は約半年である。

写真集のコンセプトは以下のように決まった。

- ①日本女子大学の歴史が国際交流の視点から紹介できる写真集。英文解説。
- ②ハードカバー、21×22cm、100ページ程度のかさばらないもの。発行部数は1000部。
- ③配布対象は創立110周年記念式典招待者、その他国際交流活動に使用。非売品。

発行は日本女子大学、編集は成瀬記念館、翻訳は3月に退職されたソートン不破直子先生（名誉教授）に蟻川学長が直接お願いしたとのことであった。折から本学はグローバル化が進むなか、国際的視野を持って行動できる女性の育成にむけて、学園の「国際化」を推進していた。語学研修や留学制度の充実、国際会議の開催、さらにはアフガニスタンやサウジアラビアをはじめアジアやアフリカの女子教育支援など国際社会への貢献も活発に行なわれている。成瀬記念館でも秋の特別展示には本学の国際交流を取り上げることが決まっており、英文の写真集というのは時宜を得た選択であった。



写真集の構成は大きく3つに分かれる。①成瀬仁蔵と創立期及び戦前の国際交流、②第6代学長上代タノと戦後の国際交流、③現在及び資料編である。写真選定に当たっては、学園史上重要な事項に関するもの、本学の特色を示すもの、各時代の国際交流の様子を象徴的に表すものを重点的に選んだ。その結果、これまであまり公開する機会

のなかった写真にも光があたった。外国人に贈呈することを考え、写真には短い説明を施したが、文字が多いという印象を与えることは避けたかった。それでも翻訳の労をとられたソートン先生のご負担は大きく、ひと夏を費やしていただいた。

制作には大学の卒業アルバムを手掛ける恵雅堂出版があたった。写真のレイアウトや文字のフォントの選定、表紙のデザインなどにセンスの良さが光っている。

この写真集についてもう一点特記すべきことは、資料編に戦前の外国からの留学生の統計を掲載した点である。

本学の国際交流の一端が本書を通じて明らかになれば幸いである。

(成瀬記念館主任)

* 目白・西生田所蔵 請求記号378.52-N69 (目白はG図書)



未整理の上代タノ資料の中から発見された写真。前列右から3人目は第5代校長大橋広。

ソーントン不破直子・内山加奈枝編

『作品は「作者」を語る—アラビアン・ナイトから丸谷オーまで』(日本女子大学叢書12)

内山 加奈枝

20世紀後半、西欧において確立された文学理論の影響下において、「作者」の概念は、様々に議論されてきた。本書では、8人の執筆者が各々に選択した、英米、日本、イスラムの文学作品に現れる「作者」の概念を考察している。

作品の生みの親としての「作者」の概念は、近代に生まれたものである。中世においても、文化圏の中で権威が認められた書物はあったが、学問の大家の権威は、自らにではなく天啓に依存するものであった。それに対して、近代の「作者」において物語の権威のよりどころになったのは、作者自身の個性であった。自らを起源とする「作者」の概念が近代に生まれたのは、神に代わって、人間を自律した個人、自由な主体としてみなすようになった啓蒙思想と切り離すことができない。だが、20世紀後半になると、人間の主体性に対する過信を批判するポストモダニズム思想が登場する。それに呼応するように、ロラン・バルトを代表とする文学批評は、作者の意図を解明することに重きをおいた従来の批評のあり方を批判した。バルトによると、あらゆる作家は、自分の文化圏に既にあるものを再利用しているにすぎない。

これ以降、「作者」に過剰な地位を与える批評は減ることになる。「作品」の代わりに、「テキスト」という言葉が好んで使われ、また、「作者」の代わりに「読者」の役割を重視する批評が現れた。作者の伝記的事実や、作者の作品以外での発言は一切考慮せず、テキストの構造だけを分析する批評も増えた。そうした批評では、作者の意図を見つけるのではなく、作者も意識していないことを探し出すことになる。

しかしながら、テキストを解釈する際、「作者」を完全になしで済ますことはできるのかという問いは残り続けた。現代思想を通過した現在、「作者」=「自由な主体」を純粹に信じる古典的な批評に戻ることは難しい。だが、批評の現場から、「作者」の主体が完全に抹殺されることはなく、その概念は繰り返し議論されている。

本書の各章は、「作者の死」と「作者の再生」という批評の流れを踏まえたくて、一様ではない「作者観」を提示している。第1章<『アラビアン・ナイト』—「作者の死」とシェヘラザードの語り>においては、作者不詳の物語群が、いかに読者によって書きかえられてきたかをポスト植民地主義的視点から考察している。第2章<ヒエロニモの沈黙—『スペインの悲劇』における作者と権力>は、トマス・キッドの『スペインの悲劇』に表象される国家権力と作者の自意識の相克について検証している。第3章<模倣と剽窃の異国ロマンス—アメリカ・ジャポニズム小説と「作者」>は、元来、模倣の上に成り立ってきたアメリカのジャポニズム文学の作者たちが、著作権や作者性に固執した背景を資本主義の消費文化に見出している。第4章<夏目漱石が現代批評に与える「生きたもの」—『こころ』における主体と倫理>は、国民的文学作品『こころ』の批評史における主体と倫理の問題を、作品論とテキスト論の双方の立場から分析している。第5章<メタフィクション「大きな二つの心臓のある川」を書いたのは誰か?—ヘミングウェイと「作者」の身体>は、作者の伝記的要素を色濃く反映するニック・アダムズの物語群を取り上げ、作者と作者に限りなく近い登場人物の関係に注目し、作者の身体性と歴史性について論じている。第6章<リチャード・ライト『ブラック・ボーイ』が語る「作者」像>は、『ブラック・ボーイ』をライトの自伝として定義づけ、そこから、ライトが考える作者像を分析している。第7章<ジェフリー・ダーマーを描くことはできるのか?—ジョイス・キャロル・オーツの『生ける屍』における作者観>は、実在の連続殺人犯ダーマーをモデルにしたオーツの小説をとりあげ、ダーマーの本質を描くことの不可能性を示しながらも、その上で、フィクション作家にできることを模索するオーツの作者観を提示している。第8章<「作者」という幽霊、「読者」という未来—丸谷オー『輝く日の宮』の作者観>は、『輝く日の宮』という作品自体が、小説とはいかなるものかを自己省察しているメタフィクション性に注目し、作者と読者、虚構と現実が互いに切り離せない関係であることを提示している。

(英文学科准教授)

ベルリン図書館事情 ー連邦公文書館内東ドイツの政党と大衆組織財団図書館ー

印牧 沙織

インターネットが日常生活で欠かせない存在になった今、アーカイブという言葉はもう珍しくない。筆者が日本女子大学で水嶋英治先生（現常盤大学教授）の下アーカイブについて学んだのは丁度NHKアーカイブスが創設された2003年のことである。その頃はアーカイブ、アーキビスト、ましてはデジタル・アーカイブという言葉は馴染みがなかった。

アーカイブは「公文書館」または「文書館」と訳されることもあるが、公文書のみならず写真、映像、録音といった歴史資料を収集、整理、保存、管理し、その閲覧を可能にする機関である。この「収集」、「整理」、「保存」、「管理」、「一般公開」というキーワード、見覚えまたは聞き覚えがあるかもしれないが、そう図書館もまさにこの役割を担う。そのため図書館とアーカイブの線引きは簡単ではない。主に書籍を扱う図書館、公文書を扱うアーカイブ、おおまかな収集対象の違いはあるとしても、例えば図書館にある灰色文献は公文書としてもアーカイブに収めることも出来る。

ドイツでは図書館情報学とは別にアーカイブ学が存在し、その伝統は16世紀まで遡る。ヤーコブ・フォン・ラミンゲン (Jacob von Rammingen) はアーカイブ学の父とされ、1571年『登録から (Von der Registratur)』を出版する。それでも図書館とアーカイブの区分けはドイツでも明確なものではなく、互いの存在をはっきりさせ区別するというよりはむしろ図書館とアーカイブの共存のあり方が推奨されているようだ。実際ベルリン国立図書館の音楽部門ではメンデルスゾーン・アーカイブを設け作曲家フェリックス・メンデルスゾーンだけでなくその一族に関する資料の収集と保管をし、一方で国立連邦公文書館 (Bundesarchiv / URL: <http://www.bundesarchiv.de>) は図書館を7つ持つ。

東ドイツの政党と大衆組織財団はベルリン・リヒターフェルデの連邦公文書館内にある図書館である。ベルリン市内から電車とバスを乗り継いで三十分、都市の雑踏とは無縁なのどかなところに位置する。もともとプロシア中央軍事学校 (Preußische Hauptkadettenanstalt) だった場所で、ナチス・ドイツ時代も引き続き軍事学校として使われ、この頃当時では最新の施設が増設された。戦後アメリカ軍がその地を「アンドリュウ・バラック」と名づけ駐在し、敷地内に入ってすぐ左側に小さな教会を建てた。白く塗られた木造の塔が印象的な外観だ。この建物が現在東ドイツの政党と大衆組織財団の図書館として使用されている。閲覧室はもと教会の礼拝堂部分にあたり、天井が高く、今だ当時の面影を残す造りはノスタルジーさえ感じさせる。およそ170万の蔵書は、主に1495年以降のドイツ史、労働者と労働組合運動、北ヨーロッパ、東ヨーロッパについての文献に重点を置く。またベーベル、エンゲルス、リープクネヒト、マルクスなどの政治運動家についての文献だけでなくナチス・ドイツへの抵抗運動や、東欧の社会主義国家での民主主義の歩みにおける文献を取り揃え、社会情勢に左右された場所ならではの政治色の濃い蔵書を誇る。



【利用方法】

登録なしで館内の閲覧は可能であるが、連邦公文書館内にあるため敷地内に入るには身分証明書 (パスポート) の提示が必須だ。訪問の際は身分証明書を忘れないように。開館時間は月曜から木曜までは9時～19時、金曜は9時～16時となっている。1995年以降蔵書とするメディアはオンライン目録 ARGUS で (参照: <http://www.wochenschau-archiv.de>)、それ以前のは館内のカード目録で検索が可能。連邦公文書館に所蔵されているメディアも司書を通して当図書館に取り寄せ閲覧ができる。

(ベルリン・フンボルト大学 学生、本学英文学科 卒業生)

日本女子大学図書館友の会第47回・平成24年度総会開催される

日本女子大学図書館友の会は、目白の現図書館開館1年後の1965（昭和40）年6月23日（創立者成瀬仁蔵先生の生誕記念日）に、第6代学長上代タノ先生の提唱により創設された。上代先生がアメリカ視察の際にスミスカレッジにおける“Friends of the Smith College Library”の存在を知り、その精神と運営に感銘を受けられたことが原点とされる。友の会の目的は、大学図書館の充実発展に寄与すると同時に、大学図書館とのつながりにおいて会員それぞれの前進向上をはかることとされ、本学教職員、旧教職員、卒業生、在学生及びその父母、その他一般の方々により構成されている。具体的な活動としては、図書館参考図書購入援助、上代タノ平和文庫選書・収集、卒業生著作調査および目録作成、各種講座・読書会および見学会・研修会開催があげられる。創設以来47年にわたり貴重な諸活動を行ってきた友の会であるが、友の会『会報』No.130（2012年3月発行）において、2013（平成25）年5月に開催予定の総会を以て解散することが表明されている。

5月29日（火）午後、目白キャンパス百年館502・503会議室で、図書館友の会第47回・平成24年度総会が開催された。石山常子氏の司会で開会の宣言があり、はじめに友の会会長である蟻川芳子学長より挨拶があった。蟻川学長は、約半世紀にわたる図書館友の会の散会を惜しみつつ、Vision120を公表し取り組んでいる教育改革について、その一環として大学の顔である図書館についても未来像を検討し発展をめざしていくことを話された。続いて島崎恒蔵図書館長より挨拶があった。島崎館長は、47年にわたる友の会の諸活動に敬意を表すとともに図書館の強力なサポーターとしての尽力に謝意を述べられ、散会は寂しく残念であるが、上代タノ平和文庫や図書館利用について図書館への継承を検討し、創立120周年に向けて大学図書館の一層の機能向上をめざしたいと話された。



図書館友の会会長 蟻川芳子学長

そして議事。議長には守田茉莉子氏が選出された。平成23年度事業報告（阪田香公子氏）、上代タノ平和文庫報告（松本晴子氏）、卒業生著作調査等報告（藤岡恵實子氏）、決算報告（中山蓉子氏）、監査報告（石山常子氏）が行われ、承認された。平成24年度活動案の説明に先立ち、飯塚美子氏より、本年1年をもって友の会活動を終わりにするが1年は従来どおり活動するとの話があり、事業計画案・予算案の説明がなされた。いずれも拍手をもって承認された。議事終了後、田口情報受入課長より平成23年度図書館報告があり、長きにわたる図書館への支援に謝意が述べられた。

休憩後、青木生子氏（本学名誉教授・第9代学長）、倉沢寿子氏（現代歌人協会会員・新制14回国文学科卒業生）の講演「『茅野雅子全歌集』を仕上げて」が、山中裕子氏による講演者紹介に続いて行われた。青木氏は、茅野夫妻と格別に深い交わりがあり、茅野雅子の生涯をまとめる責任・義務感とともに、近代歌人としての研究価値を痛感したことが研究動機となった、これまでの研究の充実・完成をめざし倉沢氏と『全歌集』を編むことにしたと語られ、資料「五十首選」「略年譜」を紹介しつつ、歌に焦点を当てながら茅野雅子の生涯をたどられた。



講演をされる青木生子氏

倉沢氏は、青木氏のもと学生時代より雅子の歌の探索にあたり、資料の所蔵館への訪問等による収集のエピソード、雅子の歌への想いの変化などを語られた。最後に、活字ではわからないが雅子の歌は調べが美しいと話され、倉沢氏による「慟哭」「鶉沼の海をおもふ」の朗読があった。

青木氏、倉沢氏の導きにより、かつてこの目白の地で学び教え生涯を閉じた雅子に思いを馳せるひとときであり、深い余韻が残された。青木氏は、資料をもとに雅子の歌の本質はこれからきわめられていくとも述べられ、今後への広がり、希望が感じられる講演であった。

（図書館事務部長・情報サービス課長兼務 中曽根緑）

一図書館（目白）玄関ホール展示一

図書館を探検しよう！2012

With
第1回図書館（目白）
館内スタンプラリー

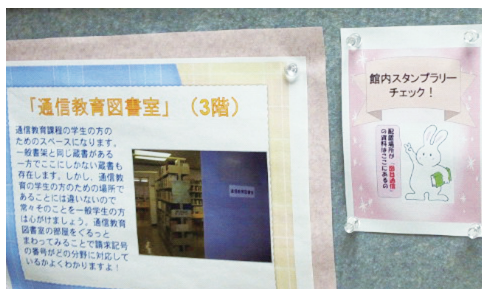
日本女子大学図書館には様々な資料と施設がある。新入生をはじめとした利用者の皆様に図書館をご活用頂きたく、図書館学生アルバイトと館員で作成したビジュアル図書館案内「図書館を探検しよう！」の2012年度版を2012年2月13日（月）～5月30日（水）に展示した。



入口2階のロッカー室、ブラウジングコーナー、学生が読みたい本、OPACコーナー、参考図書、地図台、3階・4階は和書の説明に始まり、3階の通信教育図書室、閲覧室、4階の洋書、O.S.コーナー、グループ研究室、1階の和雑誌、和雑誌新刊展示、新聞室、エレコンパック、G図書、マイクロリーダー・プリンター、AVコーナー、5階の洋雑誌、洋雑誌新刊展示、上代タノ平和文庫、ビデオ・コーナー、ビデオ・DVD、カラーコピーコーナーを案内、更にブラウジングコーナーにある雑誌、語学学習に

役立つ洋書の紹介等、館内を隈なく見ないと気づかない図書館の魅力をぎゅっと詰め込んだ。

また、第1回図書館（目白）館内スタンプラリー実施期間中（2012年4月5日（木）～28日（土））には、展示の中にスタンプ設置場所のヒントを掲示した。当館初の館内スタンプラリー参加者は188名（学生174名、通信教育課程学生10名、教員1名、職員2名、卒業生1名）に上り、実施期間中毎日参加者がいるという好評ぶりであった。この展示を見て「館内スタンプラリーに参加したい」と申し出た学生グループもあり、館内行事とのコラボレーションという試みも成功したようである。今後も積極的に図書館の魅力を提示し、更なる利用へつなげていきたいと考えている。



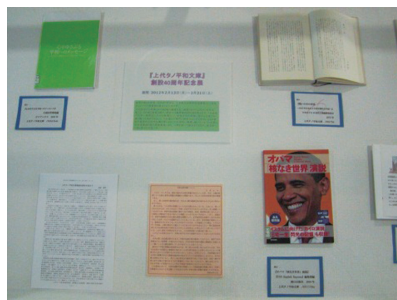
（館員・閲覧係 中澤恵子）



一図書館（西生田）玄関ホール展示一 「上代タノ平和文庫創設40周年記念展」

西生田図書館では、目白で昨年10月～12月に行われた展示の一部を引き継ぎ、2月13日（月）～5月31日（木）、玄関ホールで「上代タノ平和文庫創設40周年記念」の展示を行った。目白での展示のうち比較的新しい資料を借り受け、『図書館だより』142号の記事や、上代先生による「平和文庫寄贈について」などを併せて展示した。

OPACでの検索の際に、排架先として見かけたことがある方もおられようが、西生田キャンパスの利用者にとって「上代タノ平和文庫」は身近な存在とは言いがたい。創設40周年を機とした今回の展示を通じて、上代タノ平和文庫の意義や魅力に少しでも触れていただけたとしたら幸いである。



（西生田図書館課長 濱口都紀）

—私立大学図書館協会東地区部会研究部 研究分科会活動—

「レファレンス研究分科会」の紹介

私立大学図書館協会東地区部会には、東日本にある私立大学図書館のほぼすべてが加盟しています。業務に関する内容について図書館員が研究を行えるよう、1955年より様々な研究分科会が立ち上がり、東地区部会を母体とする研究活動として現在も続いています。

図書館におけるレファレンス業務では、利用者の学術的な相談に応えるため、様々な調査を行い必要な情報を提供しています。また、利用者に図書館に慣れ親しんでもらうため、また図書館を大いに活用してもらうため、検索指導やガイダンスなど様々な取り組みもしています。

レファレンス研究分科会は古い研究分科会で、2年間を研究期間とし、関東の私立大学図書館員を中心に定例会を開催しながら活動を行ってきました。ここ数年は、オンラインで取得できる情報へのアプローチの方法や効率的なガイドのやり方、空間として図書館を有効活用するための設備について、直接的な利用者対応から間接的な利用者対応まで利用者の環境や要求に合わせたサービス展開について、が主な関心となっています。

2010-2011年度の活動では、「ネット資源の評価に向けた指針策定」をテーマとし、インターネット上の情報資源に対して何を根拠に信頼性を判断すればよいのか、その指針となるものが構築できないかを探って研究を行いました。インターネットを介してさまざまな情報が行き来する現在、経験的・感覚的な視点で情報資源を評価するのではなく、誰もがその指針に則ることで同じような評価ができるような機能を目指して検討したものです。

業務に関連する研究を行うことは、その内容だけではなく、研究のプロセスをたどることにもなります。大学図書館利用者の大半が研究者である事を考慮すれば有益な活動と位置づけられます。

(館員・西生田図書館 鈴木学)

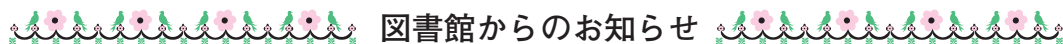
「逐次刊行物研究分科会」に参加して

私立大学図書館協会東地区部会研究部の研究分科会の活動は、1期が2年間で、2年目に行われる報告大会で研究報告を行います。私は2010-2011年度の「逐次刊行物研究分科会」に参加しました。9名(2010年途中1名退会)集まり、1年目は個人研究発表や業務についての情報交換など、逐次刊行物に関する全体的な動向について理解を深めました。2年目は今期の研究テーマを「電子ジャーナルを含めた学術雑誌におけるコア・ジャーナルの再考と、所蔵状況の調査」および「逐次刊行物を中心とした電子化された資料の今後の可能性とその提供方法について」の2つに定め、グループ研究を行い、私は後者のグループに属しました。

電子資料について、増加、価格高騰、利用増進が飛躍的な傾向にあるなかで、利用者の閲覧方法のみならず出版社の課金方法も多様化(完全無料型、著者支払・読者無料型、ハイブリッド型、一定期間後無料公開型、電子版のみ無料公開型)しています。一方で学術機関などによるリポジトリを通じての刊行物や成果物の無料公開などもあります。各大学図書館が学部構成などの各館事情を鑑みて、紙であれ電子であれ、何をどう利用者に提供するのか、激変する現在を知り将来的な動向を予測しながら、限りある予算の中で優先度をつけて運営することの重要性を改めて認識しました。

該当した年は、本学は図書館システム更改前年と更改後1年目に当たり、特に図書館システムの運用に関わる業務改善を図った時期でした。分科会の月例会や夏期研究合宿の他に臨時例会などもあり、頻繁に他の大学図書館員の方々の考えを聞く機会を持てたことは、貴重なことでした。会員が所属する大学の図書館見学も、本学の図書館を客観視する材料となっています。分科会の活動記録は、次のURLより参照できます。<http://www.jaspul.org/e-kenkyu/chikukan/>

(館員・西生田図書館 田代陽子)



図書館からのお知らせ

日本女子大学図書館 サービス向上への取り組み (2011年4月～2012年4月)

<2011年度>

- 新図書館システム「iLiswave-J V2」本稼働(4月)
 - ・WebOPAC 検索の多機能化。
 - ・WebOPAC で、従来の貸出中図書予約に加え、他キャンパス図書館所蔵図書の取り寄せ・他キャンパス図書館への取り置き手続きが可能。
 - ・目録検索メニューに新着案内、貸出ランキング、指定図書リストを掲載。
- My JWULIS 運用開始 (4月)
 - ・従来の利用状況照会、貸出更新に加え、予約順位等さらに詳細な情報が確認可能。
 - ・メールアドレス登録により、予約図書や取り寄せ図書の到着をお知らせ。
 - ・検索履歴や結果をマイフォルダに保存可能。
- 携帯サイトでのサービス開始 (4月)
 - ・開館カレンダー参照可能。
 - ・OPAC 検索、貸出更新、貸出中図書の予約、他キャンパス図書館所蔵図書の取り寄せ・他キャンパス図書館への取り置き手続きが可能。
- 館内設置メディアセンターパソコン4台増設(西生田, 4月)
- 「学生が読みたい本」実施 (6月・11月)
- 3階エレベータホール南北扉を常時解錠し通路として使用開始(目白, 9月)
- お茶の水女子大学附属図書館との相互利用協定施行(11月)
- 玄関ホール展示「上代タノ平和文庫創設40周年記念展」(目白10月～12月, 西生田2月～)
- 玄関ホール特別展示「ケルムスコット・プレス版『チョーサー作品集』」(目白, 11月)

<2012年度>

- 入館管理システム入替 (4月) ○館内設置メディアセンターパソコン6台増設(目白, 4月)
- 館内スタンプラリー実施(目白, 4月)

編集後記 玄関ホール(目白)では展示「バーン=ジョーンズの芸術」を開催中(7月12日迄)、次号に記事を掲載予定である。友の会第47回総会。寂しさを禁じえずに出席したが、当日の議事・講演からは前向きにたゆまず歩む友の会の姿勢が伝わり、今後1年の活動への積極的参加を呼びかける司会者の声により締めくくられた。上代タノ平和文庫、図書館利用等について図書館への継承を鋭意検討中である。(中曽根)

2011年度実施した利用者向け講習会

大学スケジュールとして実施

- ・1年次オリエンテーション<目白・西生田>
スライド上映:4/21目白・西生田
図書館案内:4/21西生田(自由参加形式84名参加)

教員からの依頼等により授業時間内に実施

<目白>

- 児童3回99名 食物1回6名
- 被服1回21名 家政経済1回7名
- 英文19回250名 史学8回108名
- 物質生物1回6名参加

<西生田>

- 現代社会1回12名 社会福祉3回78名
- 教育4回65名 心理2回27名
- 文化1回8名参加

図書館主催で実施

<目白>

- ・新大学院生オリエンテーション 4/27
家政学、文学、理学 8名参加
- ・資料の探し方講習会—蔵書検索編—
(10月～11月) 12回13名参加

<西生田>

- ・資料検索講習会(6月～7月, 10月)
DB日本語編 2回2名参加
DB英語編 4回4名参加
RefWorks編 1回1名参加
新聞編追加 1回1名参加
蔵書検索編 参加者なし

今年度も開催しますので、
ふるってご参加ください。